ボーン・トゥ・ビー・ワイルド

――まるで獣同士だ。

俺は素肌を心地よく滑るシーツに頬を寄せて体を伸ばす。南の島のコテージ。幸い持ち主は離脱した後らしく、家具には白いシーツが被せられていた。海から上がったばかりの俺達はボルサリーノまで潮まみれで酷い有様だった。バルコニーの片隅の真水のシャワーを服ごと浴びてそこで服を全部脱いだ。オーダーメイドのスーツもこれじゃだいなしだが仕方ない。この国でこんなのを着ている自分が悪い。

このコテージの主人はとことん怠惰なのか、南国を満喫するためなのか、部屋の中だけではなく、バルコニーにも白いシーツとクッションを並べたベッドを置いてあった。シーツの下は防水加工がされていたので、もしかすると子供用かもしれない。

腰に一枚シーツを巻いただけの、剣豪の称号を持つ男が怠惰に寝転がる肉食獣よろしく、昼寝を貪っていた。屋根代わりか、頭上にはバナナの樹木のような肉厚の葉が幾重にも重なって直射日光を遮り、その間から零れる木漏れ日は俺達の上にだんだらの影を落としていた。肌を嬲る風は熱く乾いていて水分をとばしながらも心地よい。

ふと、と山本が上体を起こして周囲を見る。

「――小僧、起きてる？」

「寝てるぞ」

うとうとしていた俺は、眠りを妨げられなくて山本の背中を向けた。

「――やっぱりさぁ疵とか治るわけ？」

山本の熱い指先が背中を辿る。疵なんてつけたことが無い。

「何が・やっぱり・だ？」

「ほら、アルコバレーノだと色々あんじゃん」

「わかってねーくせに色々とか言うな、バカ武」

「だってさー、おっきかったのがちっこくなって、そんでおっきくなったんだろ。疵とかそのままだったら大変じゃん」

まるで絡み酒のような山本が何を言いたいのかわからなくて、振り返る。子供みたいに欠伸を何回か繰り返している。やっぱり寝言か。

「相手に背中を向けなきゃいー話だろ」

「そう簡単に言うけどさ」

「ごちゃごちゃうるせぇ」

腹が減ってむずかっている子供みたいだと、指を伸ばしてもぎ取ったマスカットを山本に投げた。

「減らず口に入れとけ」

山本の髪はもうおおかた乾いていて、くせっけのままあちこちに飛んでいる。そんなナリに構わずにマスカットを嬉しそうに食べて種まで砕き、空の口を開けて待つから次の粒を投げ込んでやった。それを繰り返していると、いまだしっとりと濡れてぐちゃぐちゃの自分の髪が視界に入ってくるので後ろになでつけた。

餌付けに飽きて、一房ごと山本に渡した。

「小僧は全然目焼けしていないのな」

マスカットを受け取る山本の腕はこんがりと日焼けしていた。こいつはとっくにスーツを脱いでいた。そのまま仰向けに寝転がると、行儀悪く口の上に持っていってそのままかぶりついた。

ヨーロッパからアジア経由で逃げている途中、観光客に紛れてこの島に辿り着いた。浜で子供の物売りから買い上げたマスカット、葡萄、スモモ、オレンジ、イチジク、バナナなどが周囲に散らばっている。

「小僧、ナイフ」

マスカットを食べ終わった山本は、腹ばいになって手の中でアボカドを転がしていた。バタフライを投げると、山本はハンドルを半回転させて刺さり出しにしたブレードでアボカドを二つに割り、片側の皮を少し剥いて歯を立てる。

俺は甘いものが欲しくてスモモの皮を上だけ向いて中の果実にむしゃぶりついた。ぐずぐずで甘い果肉は汁気たっぷりで食べた端から甘い香りを漂わせている。

「人が食べてるもんって、うまく見える」

「てめぇが腹が減ってるだけだ」

「なんか女の人がさ、そんな風に食べてるとき」

山本はアボカドをシーツに軽く沈ませて、俺へと体を伸ばしてキスをするみたいに舌をつきだしてきた。チュルリと音をたてて顎を舐め上げる。

「食べたくなったりしてな」

「チョロいな」

一緒にいる時間が長すぎて、俺との境界線が無くなっている山本をほっといて、皮に残る果肉を前歯でこそぎ取り、次のスモモを手にする。

「交換」

剥きかけたスモモを渡すのと引き替えに、大きな種の跡をくぼませた緑のアボカドをもらうが、ねっとりとした脂肪分を連想して脇に置いた。代わりに葡萄をプチプチと食べる。

ざあっと風が一吹き。葉のざわめきだけで、他に音がないこんな時間は最近ではとても珍しかった。必要以上に耳をすまし、気配を感じとり、視界を広くとろうとしていた。数キロメートル以内に人が住んでいないのは確認済みだから、敢えて体の器官を休ませよう。空の上から狙われたら仕方ないが、リングとおしゃぶりが体にくっついている以上、簡単には狙えないだろう。

んーと山本は唸りながら匣を取り出して、太郎と小次郎を解放した。小次郎は風に乗って旋回して飛び去り、太郎は山本から餌をもらってこれまたバルコニーの柵を跳び越えてこれまた走り去った。

「気をつけてなー」

独りごちた山本はそのまま瞼をすとんという音がするぐ